優しく強い子に！

http://www.minamih.net/
２１・　５・２０（木）
南ＮＥＷＳｎｏ　２２

国見発
『サッカーで「人」を育てる』

小嶺忠敏著　ＮＨＫ出版

5月16日(日)の葉山遠征から読み始めました。

小嶺監督も教師で，島原商業時代に矢上と同じ事を２つしていたのです。

①チャイム席です。チャイムで授業を始めて，チャイムで授業を終わることです。どんなに途中でもすっぱりと止めました。

休み時間は子どもたちにとって大切な時間であり，時間内に終わらなかったのは私の責任だからです。

子どもたちはチャイム席を守ってくれました。

②朝の会や社会科の時間に新聞記事の切り抜きを持ち込み，みんなでその内容について考え，学習していたのです。子どもたちも記事を持ってくるようになったのです。

Ｎｅｗｓｐａｐｅｒ　ｉｎ　Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ
ＮＩＥ（エヌ・アイ・イーと読む）という実践です。

サッカーでは小嶺監督に限りなくはるか彼方，遠く及びませんが，教師としての実践に共通するところがあったことが嬉しいです。

小嶺監督の言葉 才能は褒めて褒めて、徹底的に伸ばす

上掲書　ｐ７１～７２

練習や練習試合の時、守備面は組織で守ることを厳しく指示しますが、攻撃面では、選手のアイデアとイマジネーションに任せて好き勝手にやらせます。

たとえば、かつて、三浦惇宏や永井篤志はドリブルばかりしていました。大久保嘉人や松橋章太はスピードが速いけれど、ミスが多かった。すると若いコーチは、「ボールを持ちすぎだ」「何をやっているんだ。バカヤロウ」と、声を荒げて立ち上がろうとするのです。でも、私はコーチの膝に手を置いて、「言うな。あいつには、今言う時じゃない」と諭します。ミスをしなければ、選手は伸びないからです。

ＦＷは１０回トライして、１回成功すればヒーローです。１回の成功のためには、決して残りの９回を責めてはいけません。「なんで、失敗するのか」と責めたら、自分でトライしなくなる。成功した時に、「よしいいぞ。やるじゃないか」とものすごく褒めると、子どもだけでなく、大人でもますますチャレンジし続けるものです。

そうやって、得意なことは徹底的に磨いていきます。

ただし、サボったら厳しく叱る。サッカー部のルールとしての集合時間を守らない、やるべきことをしないという選手にも厳しいペナルティを科します。

褒める言葉は植物で言えば暖かい太陽光です。矢上の家に３鉢のアシタバがあります。家の東北の角においてある３鉢で，午前中の光を浴びるだけの鉢と午前の光と午後の西日も浴びる鉢では，西日も浴びる鉢の方が大きく育っています。褒めることの大切さを実感しています。　　**写真アシタバ　奥から大・中・小**

後書きを読むと，小嶺監督は小説家：大貫哲義氏と旧知の仲と書いています。大貫氏は１９８２年２月、サッカーマガジンの特集『私のアイデアサッカー』で，由井三小の矢上とチームを訪れ，練習風景と矢上の指導理念を取材し，４ページの特集を組んでくれたのです。一部を紹介します。

。

技術スペシャル③

チームは指導者を映す鏡

矢上先生は無限でやさしい。とても三十五歳とは思えない若々しさで、こどもたちには、〝アニキ〟といった感じである。

練習でも試合でも、決して怒らない。怒ってこどもたちを萎縮させたくないという。トライして失敗しても、もう一度だと励ます。〝トライする雰囲気をもて〟とこどもたちにいうが、勝負を度外視しても〝トライすること〟、逃ぶのは指導者として、より勇気のいることである。だから強いに違いない。

船田コーチは〝矢上先生は、きすが鋭かいとこうまでこどもを見ていられる〟という。矢上先生は〝こども好きの船田さんだから、こどものためをつねに考えてくれている〟という。

OB橋部は自分のエラーで負けたとき、みんなに怒いとわんわん泣いた。その後、組織できたえにきたえた。ロドの後輪はヘディングをミスって同点にされたとき、みんなに怒いと涙を流した。そのあと〝ヘディング練習に行ちこみ、ヘディングなら誰にも負けないほど強くなった。

思いやりあふれる指導者コンビだから、思いやりのある子が育つ。ガンバ精神のある指導者だからこどもたちもがんばれる。

チームとは、指導者を映す鏡である。前八王子クラブに捧して改めて感じた。

（大貫　哲義）

テープ力をつけ周りを見るゆとりをもたせる

楽しさもアイデアももつことから生まれる。ドリブルをうまくなることだ。バトルロイヤル、コピードリブル。いずれも狙いは、ドリブルの自然な上達とルックアップの習慣をつけることにある。ハードルもコーンも大いに利用して足技をみがこう。繰り返せばスタミナもついてくる。

自然にルックアップの習慣を

練習まだけり中ぶれ子に見つけたらすぐにオンとなる。

(1)いろいろドリブルの技術を身につけるとともに、ルックアップの習慣を身につける。コーチが一人のときは、よほどよく見ていないとサインを見落してしまう。

(2)コピードリブル

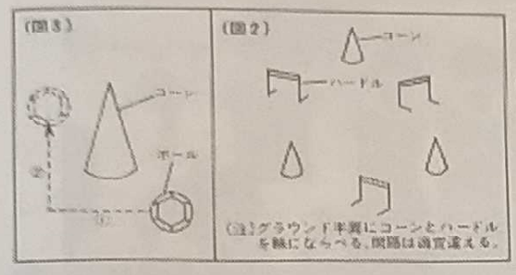
ボール、ゴールを利用していろいろなフェイントをする。それを後につづくプレーヤーが追いかけ、模倣のプレーヤーにまで伝える。

ボールにはふれていると、同じフェイントでもいろいろ自然にルックアップの習慣を身につけていくこと。

ルックアップの習慣を身につけていくと、思い切ったドリブルの上達とともに、ルックアップの習慣を身につける。また、ただグラウンドを回るよりハンデがあるため、スタミナの養成にもつながる。

ハードルとコーンで足わざとスタミナを！

グラウンドの半面に、ハードルとコーンを図2のようにセットする。



(図2)グラウンド半面にコーンとハードルを縦にならべる。間隔は適宜選べる。

(図3)

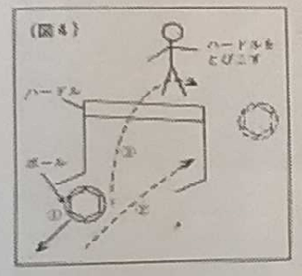
コーンとハードルは交互におき、間隔は5mから10mの範囲で、変化をつける。

コーンのところでは、図3のように、①で足の裏を使ってボールを横にころがし、②で①の足を地面につけずに、アウトサイドで前に押し出す。

ハードルのところでは、図4のように、①いちど引いてから、②インサイドで前に押し出してハードルをくぐらせ、③プレーヤーはハードルを飛び越えて前に出る。

以上の要領で、連続して10周ほど行う。

狙いは二種類のフェイントの強化になる。また、10周もすればかなりハードル練習で、スタミナもついてくる。



(図4)

107